方向
第五八号　一九八六年一一月一〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

南山大師の戒律観（三）

赤谷明海

第三章　支那の戒律

支那に仏教が初めて伝つた時期に就いては異説があるが、今仮に漢〈の〉明〈帝〉十年説を採るとして、それ以来戒律が如何に研究され実践されたかを見よう。先づ豊安の説に依れば〈註1〉、明帝の十一年に来至せる竺法蘭は、土人の請によつて三帰五戒を与え、其の後百年を経た霊帝の代に、北天竺沙門支法領等の五人によつて五人受が行はれ、それより戒法相伝が始つたが、この際支法領の口誦した戒本羯磨法による十人受に至つては、曹魏嘉平二年曇摩訶羅が初めて行つたとする。凝然の説は之と少し異なり〈註2〉、永平十年（六七）頃は「事義草創。戒法未伝。」曹魏の嘉平元年（二四九）までは「戒法未沾。」其の間桓帝の建和元年以後、支婁迦讖等来至したが「無受戒事」と言ひ、嘉平二年（二五〇）曇（柯）迦羅が十人受を行じたのが大僧受戒の初めであり更に尼衆のそれは宋の元嘉十年（四三三）にあるとする。以上のに説に依れば、大僧十人受は曇摩迦羅によつて初めて行ぜられたとする点は一致する。従つて四分律宗によつては彼を九祖中の第二祖とし、震旦の始祖として崇めるのであるが、彼以前に於いて何等受戒の事が無かつたとは考えられず、或は豊安の言ふ如く五人受が行なはれたのかもしれず、三帰五戒の法に至つては必ず行はれたであらう。是は主として受戒の事であるが、当時支

那に来た梵僧の威儀・行事・作法等は確に戒律に準拠してゐた事と思われ、戒律研究は兎も角、形式的に見た戒律は梵僧の来至と共に伝来された事は言ふまでもない。

〈註1〉『戒律伝来記』上（正・74・2・a）

〈註2〉『律宗綱要』巻下（正・74・15・c）『律宗瓊鑑章』巻六（大日本仏教全書本三一頁下段）『雲雨鈔』（同上・四七頁下段）

受戒の初めは嘉平二年にあつたが戒律教文の初伝も此の年である。即ち曇摩迦羅は洛陽に於いて『僧祇戒心』を訳出した。是は『僧祇律』の戒本である。次いで、安息の曇諦が正元元年（二五四）『四分律羯磨』を訳出し〈註1〉、其後受戒の羯磨法には之が用ひられたとされ、従つて其の頃の受戒は、受体は四分、随行は僧祇に依ると言はれる〈註2〉。ここに戒本・羯磨の伝訳を見たが、肝要の広律は更に百五十年程後れて姚秦の弘始六年（四〇四）に至り弗若多羅・曇摩流支・〈鳩摩〉羅什・卑摩羅叉の協力によつて『十誦律』先づ訳され『四分』『僧祇』等相次いで訳出を見、更に本律を解釈する律論も訳された。今南山の時代迄に出現した主要律典の訳出年時・訳者・部属等を表示すれば次の様である〈註3〉。

〈註1〉『歴代三宝記』による。（望月氏『大年表』）。南山は『新刪定四分僧戒』序に「曹魏中世法護創伝羯磨」と言ふが、之は曇諦の誤りであらう。法護の長安入りは晋の泰始元年である。

〈註2〉『律宗綱要』巻下（正・74・15・c）

〈註3〉羯磨・戒本等を含む訳出表に就いては、長井氏『南方所伝仏典の研究』（一七六頁）境野氏『支那仏教精史』（七八九頁）赤沼氏『仏教経典史論』（四二九頁）参照。

書名	巻数	訳時	国名	訳者	部属
『鼻奈耶』	一〇	三八二	符秦	竺仏念	薩婆多部
『十誦律』	六一	四〇二	姚秦	弗若多羅・曇摩流支・卑摩羅沙	薩婆多部
『四分律』	六〇	四〇八	姚秦	仏陀耶舎	曇無徳部
『摩訶僧祇律』	四〇	四一六	西晋	仏陀跋陀羅・法顕	大衆部
『五分律』	三〇	四二四	劉宋	仏陀什	弥婆塞部
『解脱戒経』（戒本）	一	五四三	東魏	般若流支	迦葉遺部
『薩婆多論』	九			失訳	薩婆多部
『毘尼母論』	八			失訳	薩婆多部？
『摩得勒伽論』	一〇	四三五	劉宋	僧伽跋摩	薩婆多部
『善見律毘婆沙』	一八	四八九	南斉	僧伽跋陀羅	錫蘭上座部
『明了論』	一	五六八	陳	真諦	正量部

此の表によつて明かなる如く、五部律中、有部法蔵・化地三部の広律及び飲光部の戒本はいづれも半世紀の間に相次いで訳出され、ただ犢子部の律は漢土に伝わらなかつたのである。『僧祇律』は当時上座根本律と考えら

れ五律以外に置かれてゐた。是等諸律の中、『五分律』の研究は栄えず、『四分』は比較的後れ、『十誦』『僧祇』の研究が早く行はれ且つ盛況を呈するが、就中『十誦』最も盛んで『僧祇』は『十誦』の傍系として研究されたかの観がある。さて羅什の戒律の師たる卑摩羅又は『十誦』の学者であり、更に『四分律』の訳者仏陀耶舎も羅什に『十誦』を教へた点から見て、羅什は『十誦』に委しかつた事であらう。羅什の同門に慧猷、弟子に慧観・僧業・慧詢あり、いづれも『十誦』の学者であり、慧詢は又『僧祇』にも達し、其弟子に道営あつて、特に『僧祇』に委しかつた。僧業の『十誦』を受けた者に慧光・僧璩・曇斌等があり、いづれも其の達人であつた。更に其の頃十誦学者として有名な人に智称がある。彼は十誦学者法穎ならびに成具を師とし、別に『僧祇律』の訳者仏陀跋陀羅の法孫に当る僧隠にも聞いたと言ふから、『僧祇』をも兼ねたであらうし、彼の弟子と見られる法聡が『四分』の先に『僧祇』を学んだと言ふのもうなづける事である〈註〉。

〈註〉四分律宗第三祖法聡の系統は従来不明であつた。今宇井氏『支那仏教史』の説に従って智称門下に入れる。

孤山雁信

—赤谷明海書翰集—　（二）

原田憲雄編

★1985.11.21.(22. 消印、23. 受領）生山四郎氏（京都市山科区安朱馬場西町四五）宛。手紙。墨書。

昨夜は御電話をいただきましたが耳の不自由な者を相手にさぞシンキクサイ事だったでしょう　超音波検査を受けられるとのこと　多分異常のないことと思いますが結果の程お知らせ下さい。高木氏の訃報意外でしたが　自

分もそんな歳であるのを今更ながら思い知らされました〈以下三十二字省略。編者〉
先月二十二日飛鳥へ同道しました折の写真がやっと焼き上りましたのでお届けします　お納め下さい
昨日今日と穏やかな小春日和に恵まれ柿の剪定をしたり畑の草を抜いたりで大いに戸外で張り切っています
末筆ながら奥様によろしくお伝えの程を　十一月二十一日　明海　生山四郎大兄

★1986.8.17.（18. 消印、19. 受領）同氏宛。絵葉書〈奈良県室生寺〉。
お盆が過ぎ甲子園の野球も終盤に入りましたのにさっぱり涼しくなりません。いずれ秋はしのび寄っているのでしょうが暑さにウダッタ感覚ではとらえられないというところでしょうか。
その後お変わりありませんか、何分残暑酷烈の候皆様十分にご保養の程願いあげます
CHRONIC HEPATITIS SUSPECT これが血検の結果、主治医からエコー依頼状に書かれた病名でした。エコーの担当医から全身CT診断を受けよとのこと、その結果により腹部動脈造影をするそうです、病名を決めるのに何とも面倒くさい手順が要るものだなとウンザリしています　いずれ又連絡します。17日

★1986.8.29. 故選典行氏宛。手紙〈封筒なし〉。墨書。
拝啓　残暑未だ厳しき候　如何お過しなされ候哉　陳者昨秋御同道致候節の写真数葉、長らく机辺に放置の侭と相成り空しく塵を留むる為体に御座候　就いては近く面晤の機もある間敷く候間取敢ず御手許にご送付申上候
頓首　猶令室様によろしく御伝言の程願上候　八月廿九日　赤谷生　故選典行大兄御座下

★1986.7.28. 大原一郎氏（高槻市竹ノ内町三二の一五）宛。葉書。

長びいていた梅雨がやっと終わり、真夏の太陽がクワッと照って参りました　本日お便りを頂戴、此方からお伺いをせねばなりませんのに恐れ入ります、先生はじめ奥様にもお変わりないご様子お慶び申しあげます、お蔭様で当方も無事暮らしています、恒例の高校野球、ゴロ寝しながら観戦していますが　平安敗退でもの足りません　そのうちお目にかかる機会をと願っています、

★1981.4.22〈23. 消印〉井村千鶴氏（宇治市南陵町一－一－六八）宛。葉書。墨書。

北山の姉上御光来　キエフでの写真いただきました　有難うございます　いずれまた　四月廿二日

★1981.5.21. 同氏宛。葉書。墨書。

御見送り後　戻って来た老仙曰くアリャ茶菓子忘レトルワイ　夕食時になって荊妻曰くアレッエライコッチャ　二十日大根忘レタア　折角の御来訪に夫妻の心至らざるに非ず　身毫録の致せるところ、憐れむべし々々　赤松先生へは連絡しておきました

★1982.5.27. 同氏宛。絵葉書〈葛城ロープウェイ〉

やんごとなき方に運び屋を依頼し何とも申しわけなく慚愧の至りです。篠原君への伝言、忘れました。すみません。村井君の伝言に曰く、「賀茂八で一パイやりたいので是非電話されたい。前日に。」とのこと。

★1985.4.15. 同氏宛。葉書。

例年にない多雨高温のせいでしょう、あっという間に桜が散り早くも石楠花さえ咲いています、目下新年度の初め、学校は何かと多忙なことと存じます、金曜日は態々御来駕、信州の銘酒を頂戴し有難うございます、感謝感

激の余り勿体なくて机上に飾っています、あの日は三人合わせて二百有余歳のおいぼれが入れ歯だらけの口をあけて呵々大笑してきました、いずれも健忘症の患者ながら、三人寄れば何とかで、エー何ヤッタカナも誰かが助け舟を出してどうにか会話が成り立ちました、いずれ拝眉の上。玉城氏の件　お便りをお待ちしています

★1986.8.12?13?　同氏宛。絵葉書〈奈良県葛城の道〉

コガネ色の稲田ではなく、今は青田ですが、この景色を右にして国道二四号を南下、墓参に帰ってきました。これが老隠居今夏最大の旅でした。

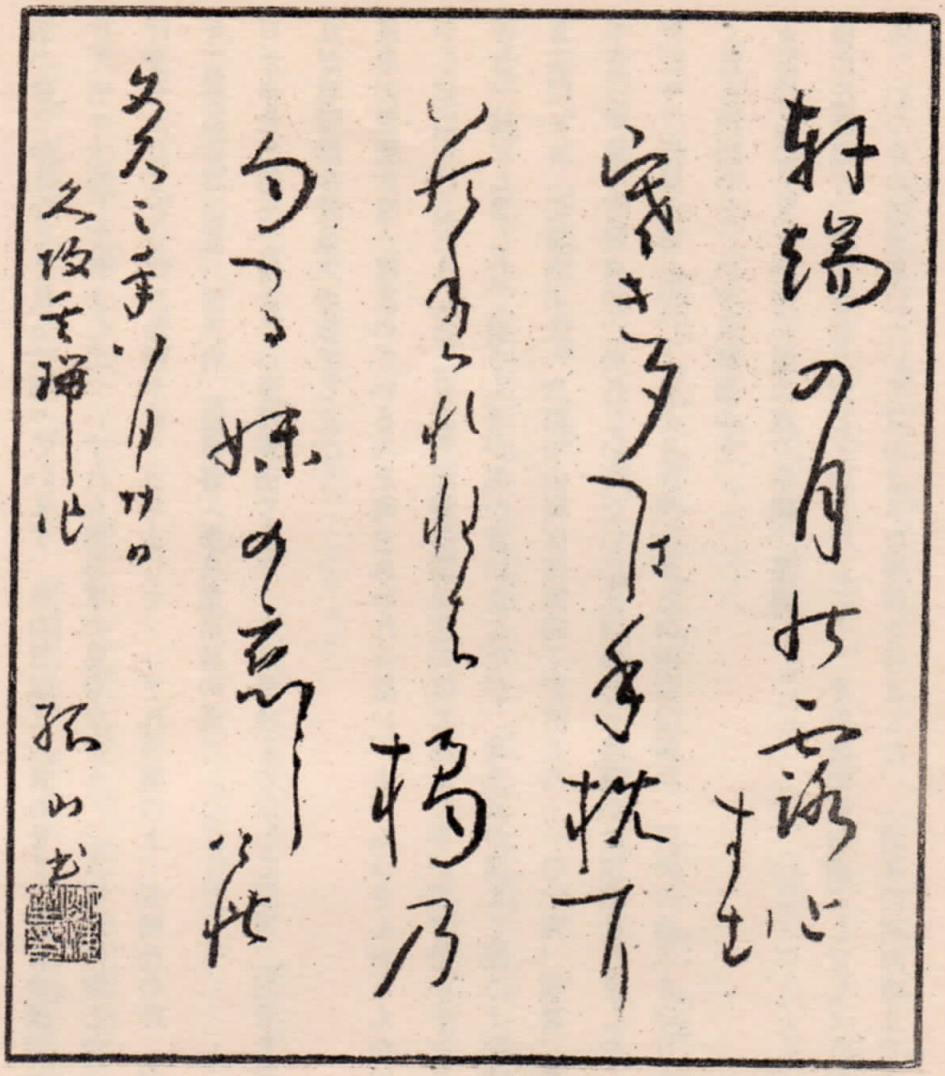
泉水の老鯉女唯一尾泳いでいるのを庵主あわれみ給い、よいムコさんおらんかいなと暑いさなかを大和郡山へさがしに出かけられました　ところが鯉の国は老夫ほど高くて手が出ず若いチンピラ十尾を求めコレデシンボウセイと一緒にしました、婆さん鯉が何か言いましたが　庵主耳が遠くて聞こえなかったとサ

★1982.8.6.　川崎泰市氏（京都市山科区御陵四丁野町五八―一〇）宛。葉書。墨書。

本五日南陵小町殿来訪、御托しいただいた諏訪のお土産確かに頂戴仕りました　毎々の御配慮恐れ入ります　聞けば十二指腸潰瘍とか、よくある症例ながら御油断は禁物、医師の指示を守り十分の御養生の程願上ます　くれぐれも御用心を、いずれ拝眉の上。

★1983.3.2.　〈3.消印〉同氏宛。手紙。墨書。

梅の花信頻り、春本番愈々近しといったところ　その後如何お過ごしでしょうか　先週土曜書塾へ出ましたところ、いつかの桔梗屋について次のような情報を得ました、「昭和の初め頃まで大門の近くにあった島原では一、



歌の瑞玄坂久　書海明谷赤

二を争う店、息子の刑事事件で店をたたんだ」とのこと。その節　末松謙澄の防長回天史を一見しました

なかなか委しく史料を連ねています貴君は既に読了された事でしょう。まだなら借り出してきます。拙宅へよく来られる南部彰造氏（洛陽高教諭）が親戚に当る人だからと『福田理兵衛』（昭和十一年刊）なる本を持ってこられました　嵯峨の材木商で天龍寺駐屯軍に参加し、禁門の変には長男と共に中立売方面の攻撃に

出向いています、久坂玄瑞の事は出ていませんが当然相知の仲だったでしょう、明治政府から叙位の沙汰を受けています、（長州で死没）

右たいして役に立つとは思いませんが最近の見聞を御連絡いたします。二月二十八日故遐氏と第二武田病院に青山昭氏を見舞いました　案外元気でした　三月二日夕　赤谷生　川崎泰市様

★1983.9.9.　同氏宛。葉書。

昨日は釣果沢山に頂戴、有難うございました、早速に大アジは刺身に小アジは焼いてニハイズで賞味、残りは冷凍庫入り、太刀魚は今晩いただきます、家内不在とはいえ夕食の用意もいたさず、さぞ空腹を忍ばれたことでしょう、失礼しました。昨夕夕立の配給漏れをブツブツ云っていましたところ、今日は正午頃からオマケづきの大振舞、お蔭でぐっと涼しくなりました、自然の涼味は格別です。

★1983.12.22.　同氏宛。葉書。愚書。

昨日は葉牡丹を御恵与下され恐悦至極に奉存候御蔭様で冬枯の花壇が華やかになりました、既に投函の賀状に書添えておきましたが小生宅の新年宴会は四日にしましたが、貴殿の行事の変更で都合がつけば御来遊下さい　二十二日

★1984.8.17.同氏宛。葉書。

猛烈な今年の暑さでしたが昨日の久し振りの夕立から秋の気が少々動きだしたかに感ぜられます。昨日は態々の御来駕に不在にして失礼しました、その節信州の御土産を頂戴有難うございます、両親の墓参に帰ったついでに

曽祖父の墓を捜しに赤松という所へ行き、幸い見つけることができました、そこは三〇〇㍍程の山の峯にある小さな集落で、この前出かけた丹波篠山の奥よりもっと人跡稀なところ、生命あれば来夏にも訪れたいと思っています、残暑なお酷烈、御自愛の程を。

★1986.6.12.同氏宛。葉書。

十日付の御便り昨十一日拝見しました、此方こそ御無沙汰失礼しています　五月から龍大での戒学研究会に出席するようになりましたが、毎週のこととてその準備に追われ、その上ＮＨＫの篆刻講座も受けるようになり、此方にも宿題があって何かと多忙です、お蔭で思託〈律師の研究〉の方は頓挫中、予定が狂っています、貴殿毎夜執筆中とか、完成の日を期待します、いずれ拝眉の機があろうと思いますが取敢ず御返事迄。身体の方無事。

★1949.3.24.東森善城氏（奈良県宇陀郡三本松村向淵）宛。絵葉書〈法金剛院所蔵古伽藍の図〉。差出し住所は京都市右京区花園法金剛院。

日ごと御活躍の事と存じます　小生社会事業の方へ転身する手筈を進めてゐましたが早急に開始する見込みが立たず、地許学校の就職も不首尾に終わりましたため不本意ながら平安に留ることとしました、この際どん底まで落ちこむ方が修行になるとは知りつつ徹底出来ない我が身のルーズさが苦々しいです。勿論これにはケンゾクの存在も影響してゐますが。お蔭で西光氏と同じく社会科を受持つ様なことになりました。又これから一年不平ダラダラの教員生活です。では何れ又。

★1983.12.1.同氏宛。葉書。墨書。〈東森氏注§去る11.26.本堂等修復完成慶讃法要。30.赤谷夫妻来訪〉

蓋かへて能令瓦礫実生金み寺の主の宣らす言かな〈§能令瓦礫実生金は聖覚法印所引の「慈愍法師」の御文〉
あれこれを語り語りてなほ果てず室生の里に一日暮れにき〈§あれこれとは1982.12.11-28.のインド仏跡巡拝、1983.3.姉の五十回忌、7.父の三十三回忌、9.母の十三回忌の法要のことなど〉
怒涛の如く寄せくる君が言の葉の中に際立つ竹渓山寺〈§竹渓山寺は道慈律師隠棲の寺と伝える〉
昨日は有難うございました　歩いて行かなかったのが唯一の心残りですが縁あれば叶う時もありましょう〈§歩いて云々は、室生口大野の駅から東森の自坊正定寺までの道のこと〉
★1984.9.26.同氏宛。手紙。封筒のみ墨書。先の「三本松村」が「室生村」に改まり、差出し住所は宇治市伊勢田町中山七三。1983.12.1.の葉書も同様であろう。
凌ぎ易い季節になって参りました　白萩の花がこぼれ木犀の香がただよって正に秋定まれりの感があります、
ところで昨日平安学園へ参りましたところ寸土君に出合い、貴兄が入院しておられたとの事を聞いて驚きました
幸いに既に退院された由ですが　心臓が悪かったとか、ものがものだけに案じています、
血圧が高くて医者にかかっているとは先般お目にかかった節承っておりますが、その後どんな症状をおこされたのやら、病名は何なのか、寸土君も委しくは知らないようでした　天理の病院を出られてからどうしておられますか、寺務で無理されるようなことはありませんか、重ね々々御用心下さい、
八木のかかりつけの医師のところへ通っておられるのではと想像していますが、もし必要ならば小生十数年来世話になっている県立医大付属病院の田村医師を紹介します、第三内科の主任で多分助教授だろうと思います、又

よく知った婦長さんもいます、家内の教え子の親です、
去る七月中旬、御子息から山崎慶輝君や小林実玄氏の書簡を送っていただいたとき、貴君急用のためと書かれていましたが、今にして思えば天理病院へ行かれる時か、すでに入院中の時だったらしく、そんな時に態々御配慮を煩わしていた訳で恐縮しております、
涼しくなったら森野薬草園へ連れて行ってくれと西方院の現住に頼んでありますのでそのうちに実現するでしょう、その時には足を延ばして向淵へ参上します、委細はその節にゆずりくれぐれも御用心をと取敢ず御見舞申しあげる次第です、　九月二十六日　赤谷生　東森善城様

★1984.10.19〈20消印〉同氏宛。手紙。封筒のみ墨書。

前略　先日は大勢で参上しご迷惑をおかけしました　また帰りにはいろ々々と頂戴物を賜わり有難うございました、手造りの山椒煮はなかなかの逸品、宇陀の山地を想いながら、毎日賞味させていただいております
貴兄の病気、お目にかかるまではどんな症状かと案じておりましたが、意外に元気そうで、身のこなしも軽やかに見え安心いたしました、最初の処置が適切だったのでしょう
先日の写真焼き上りましたが小生が撮った分（西方院静女史と一緒の分）はブレてお目にかけられません、代りに松源院の新造庭園のものを入れておきます、遠景に大台ケ原が見えるとの事でしたが定かではありません
秋も次第に深まって参ります、日に々々寒さも加わりますこととて御養生につき十二分に御留意下さい
末筆ながら御家中皆様によろしく。草々　十月十九日　赤谷生　東森善城大兄

鷓鴣天

―李清照（三八）―

原田憲雄

ほんのり黄いろくやさしい姿。／遠くはなれていても香りはただよう。／浅緑やくれないばかりが色ではない、／これこそまさに花の中での第一流。／／梅は妬み、／菊は恥らうでしょう。／欄干にひらける中秋の景にぬきんでた花。／詩人ともあろうお方が情けなや、／なぜかあのとき離騒の中に詠み込まなかった。

「鷓鴣天」は、本稿（二七）にもあった。このたびのは題を一本に「桂花」とする。桂花とは木犀のこと。その花の散った今、また取上げるのは気がきかないが、早過ぎるか遅過ぎるのがわたしの常、おゆるしください。

暗淡輕黃體性柔。Ān dàn qīng huáng tǐxìng róu

「暗淡輕黃」とは、暗黄、淡黄、軽黄で、木犀の花が、在る場所によって照り翳る色合いをいい、体性とは花をつけた木の姿をいう。「柔」はその姿の表現としてなかなかいい。

情疏跡遠只香留。Qíng shū jì yuǎn zhǐ xiāng liú.

庭に木や草を植え込むとき、中心や前面にぴったりのものがあり、背景や添え物にふさわしいものがある。一の心はどうしても中心や前面のものにひかれ、うばわれ、背景や副え物はわすれたり疎んじたりする。木犀はまずは背景におかれる木、だから花をつけないうちは、そこにあるかとも思わぬものだ。それが情疏跡遠。だがあの高雅な香りがただよいはじめると、たちまちそちらに心がひかれ、

何須淺碧深紅色，Hé xū qiǎnbì shēnhóngsè,

自是花中第一流。zìshì huāzhōng dìyīliú.

春草のあさみどり、燃える牡丹の深紅だつて、とっても此の花の上品な淡黄に及びはしない。忘れていたすまなさ申し訳なさが、弾んだ讃辞となるのだが、木犀を目の前にしているかぎり、おべっかとも褒めすぎとも思えない。以上が前段。

梅定妒，　　méi dìng dù,

菊應羞。　　jú yīng xiū.

木犀はおのれを際立たせて他の花と競う心はなさそうにみえる。だが、その気高さが、かえってあの梅にさえ嫉妬心を懐かせ、菊にも恥ずかしい思いをさせるのであろう。

畫闌開處冠中秋。Huàlán kāichù guàn zhōngqiū.

唐の鬼才李長吉は「金銅仙人辞漢歌」に、

色どり美々しい欄干に　木犀は　秋の香薫ゆし　　画欄桂樹懸秋香

三十六の宮殿は　いたづらに　苔むす　碧　　三十六宮土花碧

と詠じた。美々しい欄干の前にくり展げられる秋の景観のうちに冠絶するこの花を、歌いえて流石である。

騷人可煞無情思，　sāorén kěshà wú qíngsī,

ところが、あの屈原どのときたら、詩人中の詩人といわれ、長吉の敬慕したひとだというのに、この花に対しては味もそっけもない。

何事當年不見收。hēshì dāngnián bú jiànshōu.

何と言うこと、あの「離騒」、うんざりするほど木や草の名の飛び出すあの詩篇を作ったとき、木犀は詠み込まなかったじゃありませんか。

李清照と同時の陳与義にも「楚の人はひとり咲くめでたさ知らず、離騒に見えぬは千年の遺恨」（詠桂・清平楽）なる句がある。どちらがどちらに学んだのか、暗合か、は知らない。これに対して、「離騒」にはないが、「九歌・東皇太一」に「桂酒」の語があるから、屈原は木犀を無いがしろにはしていない、ときまじめに弁護する学者もあって面白い。（一九八六年一〇月二九日）

※前号正誤　一一頁一四行　××→豆蔻

大槻鉄男『古同　翔』　1974.12.23.　原田憲雄

ボードレールについての貴論『高翔』を読ませて頂きました。鋭い火箭が、一瞬、深い淵を照らし出すのを目撃したような、激痛と歓喜とを覚えました。「夕べの諧調」のところの〈忘れがたい夕べの思い出に、思いはめぐる〉や、第五聯についての〈一度知ってしまったものは、忘れても思い出す〉などのことばは、忘れたいもの、忘れたと思っていたものへ読む者をつれもどし、苦悩を愉楽の底に突き落とし、愉楽を苦悩の天に飛翔させるようです。詩の翻訳もあなたのお手に成っていたらどんなによかっただろうと、そのことだけがやや残念でした。

※1986.9.13.京都大学人文科学研究所から『悪の花　注釈』を贈られた。上下あわせて一五三四頁の大冊。多田

道太郎、荒井健、山下正男、宇佐美斉、天野史郎、杉本秀太郎、大槻鉄男、竹内成明、松本勤、西河長夫、湯浅康正、松田清、竹尾茂樹の諸氏が参加したボードレール詩集の共同研究。上冊目次の前の頁に「亡き大槻鉄男の思い出に」と献辞がしるされる。大槻氏は、教員時代の同僚だった。無口なひとで、こちらから話しかけても、挨拶程度でおしまいになった。が、中国の詩文についての日本人の解説で文章の優れたものはないか、と尋ねられたことがあり、氏の文章を掲載した雑誌をもらったこともある。『悪の花　注釈』中の「高翔」も、大槻氏が担当しているが、わたしが書いたのは、京都女子大学『人文論叢』第二三号に載った論文に対するものである。「高翔の下降性について」という副題がついていた。その後、1976.5.26.に、「ある幻想―ブルトンとクリムト―」についての感想を手紙にかき、控えも残っているのに、自分の書いた文字が今のわたしに読めないところがある。氏の詩と散文は、論文以上に愛読したが、そのことを氏に言ったことは無いように思う。長いあいだ同じ処につとめながら、あわあわとした付合いだった。しかし、氏の友人たちがいつまでも深い敬愛を氏に持ち続けているのを見るのはうれしい。1986.10.30.

呵呵大笑

―ランカーの岸辺で　（二六）―

原田憲雄

51. そのとき、ボサツ群と帝釈・梵天・四天王らはこう思った。いかなる因、いかなる縁によるのであろうか、如来・供養を受くべき・正しく遍き知者が、一切の存在のなかで自在を得てよりこのかた、いまだかつてこ

のようにはっはっと大きく笑い、その身から無量の光を放たれたことはない。黙ってとどまり内身の智慧の境界に専念することをよしとせず、獅子の目付でランカー王が真実の法を思うのを観察されたことは。

魏訳「爾時。菩薩衆。帝釈梵天。四天王等。作是思惟。何因何縁。如来応正遍知。於一切法中。而得自在。未曾如是。呵呵大笑。復於自身。出無量光。黙然自住。専念内身。智慧境界。不以為勝。如師子視。観楞伽王。念如実行。」

唐訳「爾時諸菩薩。及諸天衆。咸作是念。如来世尊。於法自在。何因縁故。欣然大笑。身放光明。黙然不動。住自証境。入三昧楽。如師子王。周廻顧視。観羅婆那。念如実法。」

梵文 atha tasya bodhisattvaparṣadaḥ teṣāṃ ca śakra brahmādīnāmetadabhavat—ko nu khalvatra hetuḥ, kaḥ pratyayo yadbhagavān sarvadharmavaśavartī mahāhāsaṃ smitapūrvakaṃ hasati raśmīṃśca svavigrahebho niścārayati? niścārya tūṣṇīmabhavat svapratyātmāryajñāna gocara samādhi mukhe patitāśayo'vismitaḥ sirmhāvalokanatayā diśo'valokya rāvaṇasyaiva yoga gatipracāraṃ anuvicintaya manaḥ.（そのとき、あのボサツ群と、帝釈、梵天たちはこう思った—さて、原因は何、条件は何だろう、一切の存在を支配する世尊が、微笑に伴われた大笑いをし、光を自己の身体から放出したのは？ 放ちおわって沈黙し、自内証の聖智の境界である三昧の入り口で楽しみ、驚かず、獅子のような姿で諸方を見、ラーヴァナのヨーガの修行を熱考しつつ。）

「ボサツ群と帝釈・梵天・四天王ら」はランカー城の会衆である。このうち「四天王」は梵文・唐訳にはないが、50 ,に世界の守護者・四天として出ていた。「いかなる因、いかなる縁」というのは唐訳のように「いかな

る因縁」というのと意味の上では同じく、何が原因かを問うている。しかし「原因は何、条件は何」という梵文との対応では魏訳のほうが内容・形式ともに近い。これは梵文のmahāhāsamahāsat を「呵呵大笑」とした魏訳と「欣然大笑」とした唐訳との差異にも見られる訳者の態度の違いが生んだものであろう。唐訳は、中国語としての形式美と訳者の独自性を誇示するほうに忙しく『楞伽経』を『楞伽経』の立場からすくいとろうとする姿勢に乏しい。因に対し縁をたてるとき、因は、結果を生ぜしめる内的な直接原因を指し、縁は、外からそれを助ける間接原因をいう。如来の放光に会座の人が疑問を抱くのは本経だけではない。『法華経』の序品でも、世尊が眉間から光を放つと、マイトレーヤ・ボサツが「世尊がこのように偉大な前兆を示し驚歎すべき奇蹟を現わされたのは、一体どのような原因があり、いかなる訳があるのであろうか」（岩本裕訳）とうたがい、僧、尼僧、在俗の男女の信者の四衆、天、龍など八部神衆、人間、鬼霊たちが同じ疑問をもった。『楞伽経』では疑問をもつ者のうちに入らないのは、他土からの仏と、大比丘衆と、夜叉たちである。仏は他土のひとであっても、同じく仏であるこの土の世尊の意図は、分かっているはずだから、触れる必要はないのであろう。夜叉たちは、この放光が世尊と夜叉王ラーヴァナとの間の共感による「世尊」と「夜叉」との焼尽消滅なることは分かっているから、疑問はないはずである。では比丘たちは？　おそらくかれらは、まったくわけが分からなくて、疑問さえ生じなかったのであろう。疑問をもつことは、解決への第一歩を踏み出すことである。問題は、すぐに解けるとはかぎらぬし、解けても気に入る解決ではないかもしれぬ。あるいは、結局は解けなかったということになるかもしれぬ。だが、それもまた一種の解決である。疑問をもたぬ者にはその解決がない。

さて、ボサツたちの疑問の言葉のなかに魏訳と唐訳では反対になるような句がある。わたしが「よしとせず」と訳した魏訳の「不以為勝」が、唐訳で「入三昧楽」となっているのがそれである。相当する梵文は、samadhi mukhe patitasayo（三昧の入り口で楽しみ）だから、三昧に入って楽しみ、という意で唐訳と合うとすべきだろうか。ただ「入り口で」というのは、入らずにその外で、という方向で考えうるのではないか。もしそう考えうるなら、梵文は魏訳と唐訳の中間にあるといえよう。言葉の解釈はともかく、事柄として唐訳ではおかしい。

ここの場面は、世尊が再現したばかりのシーンである。再現する前の消滅していた間は、世尊が三昧にはいっていたとすべきだ。三昧から出てきたばかりの世尊がまた三昧に入るのでは、それこそ三昧に入りっぱなしということにならないか。『法華経』序品の放光は、世尊の三昧の終わり、『法華経』説法の開始を告げるものであった。ここでも、世尊の放光は、沈黙の終了、行為の開始を示すものであるはずだ。

菩提樹下で初めて悟りを開いた釈尊は、悟りの楽しみを味わった後こう思った「わたしの覚った真理は、深遠難解で、賢者のみが知りうる。貪りと怒りに悩まされる世人には、この真理は理解しがたい。わたしが教えを説いても、人々が理解してくれなければ、わたしに疲労と憂慮があるだけだ」そして説法しようとしなかった。世界の主である梵天が現れて「尊い方よ、教えをお説きください。この世には汚れの少ない人もいます。彼らは教えを聞かなければ退歩しますが、聞けば真理を悟る者となりましょう」。こうして、三度請われたのち、釈尊の説法がはじまったといわれ（Vinaya, Mahavagga, 1, 1, 5）以来重要な説法は神秘的な事件で飾る伝統がある。『法華経』の序品はそれで、『楞伽経』の放光も、やはり説法の開始を示すものに違いなく、「黙ってとどまり内身

の智慧の境界に専念することをよしとせず」には初転法輪の説話が反映し、すなわち三昧からは出るのであり、入るのでは決してない。ここの梵文をどう読むべきかはともかく、筋道をしっかり押さえているのは、やはり魏訳であろう。

52. そのとき、聖者マハーマティ・ボサツ大士は、さきにランカー・ラーヴァナ王の願いを受けていたので、ランカー王を思い、もろもろの一切の大ボサツ群の心と意向とを知り、未来の一切の衆生をも観察し、かれらの心が言葉の教説を楽しみ、一切の声聞・独覚・外教のヨーガにとらわれた人々が、諸仏・世尊は一切の心識の対象から離れているのに、なぜあんなに大きく笑うことができるのかと、心迷い疑いが生じているだろうと思い、かれら大衆の疑心を断ち切るために、仏に問うて言った、如来は、何の因、何の縁により、どうしてはっはっと大笑いされたのですか。

魏訳「爾時。聖者大慧菩薩摩訶薩。先受。楞伽羅婆那王。所啓請已。念楞伽王。知諸一切。大菩薩衆。心行之法。観察未来。一切衆生。心皆楽於。名字説法。心迷生疑如説。而取著於一切。声聞縁覚外道之行。諸仏世尊。離諸一切。心識之行。能笑大笑。為彼大衆。断於疑心。而問仏言。如来何因何縁。何事呵呵大笑。」

唐訳「爾時。大慧菩薩摩訶薩。先受。羅婆那王請。復知菩薩。衆会之心。及観未来。一切衆生。皆悉楽著。語言文字。随言取義。而生迷惑。執取二乗。外道之行。或作是念。世尊已離。諸識境界。何因縁故。欣然大笑。為断彼疑。而問於仏。」

梵文　Atha khalu Mahāmatir bodhisattvo mahāsattvaḥ pārvamevādhyesito Rāvaṇasyānukampām upādāya

tasyā bodhisattvaparsadaś cittāśaya vicaraṃ ājñāya anāgatāṃ janatāṃ cāvalokya deśanāpathābhiratānāṃ sattvānāṃ cittavibhramo bhaviṣyatīti yathārutārthābhiniviṣṭānāṃ sarva śrāvaka pratyekabuddha tīrthya yoga balābhiniviṣṭānāṃ tathāgatā api bhagavanto viniṛttavijñāna viṣayā mahāhāsaṃ hasanti, teṣāṃ kautūhala viniṛttyarthaṃ bhagavantaṃ pariṛcchati sma— kaḥ khalvatra hetuḥ, kaḥ pratyayaḥ smitasya pravrtye?(そのとき、さきに招待されたマハーマティ・ボサツ大士はラーバナへの共感と贈与のために、あのボサツ群の心と意向と思考とを知り、未来の群衆をも見、教説と読誦を喜ぶ大衆の心に動揺があるであろうと思った。声高に語られる言葉の意味に執着する声聞・独覚・外教のヨーガの力に執着する人々にも、識の対象を離れた如来世尊の大笑いに付き。そこで奇異の念を断つため世尊に問うた、さて、因は何、縁は何ですか、微笑の出現の。)

マハーマティの名は、この経のはじめから見えるが、発言するのはこれが最初で、「請仏品」ではここだけ。そうしてマハーマティが更に発言する「問答品」以下には、ラーヴァナは全く姿を見せなくなる。マハーマティが、他土から来た諸ボサツ諸天むけのラーヴァナの顔、つまりかれらとの関係を成立させるためのラーヴァナの方からの窓だとすれば、その意味がよく分かる。そうして、「請仏品」からすればラーヴァナが素顔であり、マハーマティが仮面なのだが、他品から見ればマハーマティが素顔でラーヴァナが仮面ということになる。もうひとつ注意すべきは、ここに「未来の群衆」の方へも窓が明けてあることである。「他土」という空間と「未来」という時間の交叉するvelaに、素顔ともなり仮面ともなる十頭のラーヴァナ＝マハーマティが立つ意味が、そこ

に明らかに語られているではないか。

53. 仏は聖者マハーマティ・ボサツに告げる—そうだ、そうだ、そうだマハーマティ、実にいいマハーマティ、君が世間の妄想分別の心、邪見顛倒を観察しうるのは。また君が過去・現在・未来のことをよく知り、このことを質問したのは。君の質問したように、智者の質問もまたこのように自らと他の利益のためになされるものだ。マハーマティよ、このランカー王はかつて過去の一切の諸仏・供養さるべき・正しく遍き知者にこのような二法について質問した。いままた現在、わたしにこのような二法について質問しようとしている。この二法は、一切の声聞・独覚・外教の者が、いまだかつてこの二法を知らなかったのだが、マハーマティよ、この十頭の羅刹は、未来の一切の諸仏にもこのような二法につき質問しようとしているのだ。

魏訳「仏告聖者。大慧菩薩。善哉善哉。善哉大慧。復善哉大慧。汝能観察。世間妄想。分別之心。邪見顛倒。汝実能知。三世之事。而問此事。如汝所問。智者之問。亦復如是。為自利利他故。大慧。此楞伽王。曾問過去。一切諸仏。応正遍知。如是二法。今復現在。亦欲問我。如是二法。此二法者。一切声聞。縁覚外道。未嘗知此。二法之相。大慧。此十頭羅刹。亦問未来。一切諸仏。如此二法。」

唐訳「仏即告言。善哉大慧。善哉大慧。汝観世間。愍諸衆生。於三世中。悪見所纏。欲令開悟。而問於我。諸智慧人。為利自他。能作是問。大慧。此楞伽王。曾問過去。一切如来。応正等覚。二種之義。今亦欲問。未来亦爾。此二種義。差別之相。一切二乗。及諸外道。皆不能測。」

梵文 Bhagavanaha — sadhu sadhu Mahamate, sadhu khalu punastvam Mahamate, lokasvabhavam avalokya

kūdṛṣṭipatitānāṃ ca lokānāṃ traikālyacittāvabodhāya māṃ praṣṭumārabdhaḥ, evaṃ paṇḍitaiḥ paripṛcchana jātīyair bhavitavyaṃ svaparobhayārthaṃ, eṣa Mahāmate Rāvaṇo Laṅkādhipatiḥ pūrvakānapi tathāgatān arhataḥ samyaksaṃbuddhān prasnadvayaṃ pṛṣṭavān, māmapyetarhi praṣṭukāmo yadanālīḍhaṃ sarva śrāvaka pratyekabuddha tīrthyayogayoginām praśnadvayaprabhedagatilakṣaṇam vibhāvayitum, ya eṣa praṣṭukāmo daśagrīvo 'nāgatānapi jinānprakṣyapi.（世尊は言った—そうだ、そうだ、マハーマティよ、実にいいことだ、君によって、マハーマティよ、世間の本質が見られ、悪しき見解に陥った世間の三つの時の心を覚醒させるためにわたしに質問しようとしはじめたのは。学識ある人は自他双方の利益のためにそのように問う者でなければならぬ。マハーマティよ、このラーヴァナ・ランカー王は、過去の如来・供養さるべき・正しく遍き知者に対しても二つの問いをただした。わたしに対しても今ただそうとしている。一切の声聞・独覚・外教のヨーガの修行者たちに味われたことのない二つの問いの差異の相を表現するために。この十の頭ある問う人は、未来のジナたちにも尋ねるだろう。）

魏・唐訳のいう「三世」は梵文の traikālya（三時）で過去・現在・未来を指す。時間を過去・現在・未来と分けるのは、妄分別の与える名称で、そのような分け方からすれば、「過去」なる時間を更に過去・現在・未来と分けうるだろうと、後に言っている。この考え方は、ここの魏・唐訳でははっきりはしないが梵文では確かである。だが同じこの一節で、世尊は過去・現在・未来という言葉を使い、ラーヴァナを、その過去・現在・未来における「問う人」として規定している。

世間、すなわち人間社会で通用する言葉を、その通用の仕方が誤っているとして、真実を語ろうとしても、言葉は通用している文脈から蒸留しきることは困難だ。現代の哲学や思潮のなかで言語論が大きな幅を占めているのは、言葉の複雑な重層性を解きほぐさずにおいて、真理問題に立ち向かっても解決しがたいことに、人々が気づき始めたからであろう。『楞伽経』は四世紀には成立していたようだが、既にこの問題にふれ、悪戦苦闘している。これを現代の言語論の最尖端まで引っ張ってきて交通整理するだけの力がこちらにないので、われながら歯がゆいが、『楞伽経』の苦闘のすさまじさは感じることができる。

ここで、更に注目すべきは、ラーヴァナが「未来の問う人」と規定されたことであろう。他の経典ではたいてい問う人は未来世で仏になることが世尊によって予言される。『法華経』に出てくるサーガラ竜王の娘のごときは、世尊の予言も待たず、人々の見ているうちに仏となり、南方の無垢世界で教えを説いた。

ラーヴァナは、これらと違って、世尊から「この十の頭ある問う人は、未来のジナたちにも尋ねるだろう」と宣告されているのだから、未来にも問う人でありつづけるのだ。ということは、かれはいつまでも仏にならず、いかなる他の世界・国土にも行かず、ランカーで夜叉王として、夜叉たちのために差別の根源を問いつづける、ということであろう。それならばラーヴァナは、「すべての衆生がニルヴァーナに入るまでわたしはニルヴァーナに入るまい」という誓願をもったイッチャンティカということになるではないか。本稿「アヌカンパ」で「大悲闡提」という『楞伽経』に特異な思想について述べ、その根拠がここにあると言ったが、それがあかしされたことになろうか。

（一九八六年一一月六日）